

1. 学校ビジョンを共有化した学校経営について

2. はじめに

本校は、昨年創立70周年を迎えた工業高校である。県内外に多くの工業技術者を輩出し、ものづくりの一端を担ってきた。その伝統ある工業高校を取り巻く状況も時代とともに変化してきた。生徒数の減少や中学生の普通科志向の高まりに伴い、学科の改編・廃科を経ても定員割れがおこり、入学しても進路意識や目的意識が希薄な生徒が増えている。また全国的に経済が低迷し、非常に厳しい雇用情勢、労働環境となり就職求人数が減少し、大学等に進学希望の生徒も増えている。鳥取県教育審議会は、平成24年度から平成30年度にかけての「次の時代を担う生徒を育成するための今後の活力ある本県高等学校教育の在り方について」の第2次答申を発表し、今年度中に平成24年度から平成30年度の高校改編計画を決定する。この機会を捉え、ここで原点に立ち戻り、学校としての存在意義(ミッション)の共通理解をはかり、10年、20年後の展望がもてる鳥取工業高校のビジョンを検討する必要があると考える。その際、トップダウンではなくボトムアップを取り入れた学校ビジョンの共有化と組織的取り組みによる学校づくりをめざすことが理想である。そこで、このような目的のもと、本年度、学校改革プロジェクトを立ち上げ、改革への具体的な道筋が作られたので報告する。

3. 研究内容

学校改革プロジェクト

○検討内容

今後10年後程度を見据え新しい時代に対応した工業高校としての本校のあり方を検討し、あわせて学校改革の基本理念を構築する。

1. 新しい時代において地域の人材を育成する工業高校に、何が求められるか。(ミッション)
2. 工業教育をとおして、どのように生徒の人格

形成を行うか。(ビジョン)

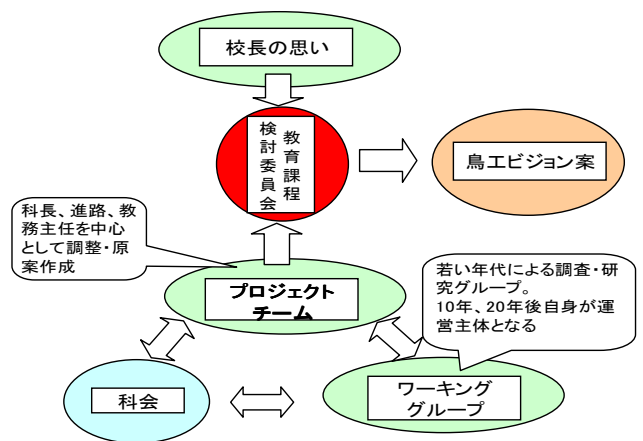
3. 中学生にとって魅力ある工業高校とするためには、何が必要か。
4. 地域産業、大学、行政機関との連携をどのようにして充実させるか。
5. 1～4を具現化するためには、どのような改革が必要となるのか。

○手法

1. 中学校への聞き取り
(鳥取北中、東中、南中、桜ヶ丘中、中央中)
2. 鳥工の生徒・保護者の満足度調査
3. 先進校の研究(鹿児島工業高校, 鹿児島実業高校, 熊本工業高校, 大村工業高校, 姫路工業高校, 徳島科学技術高校, 阿南工業高校)
4. 地域産業、大学、行政機関との意見交換
5. 校内での議論

プロジェクト会議 11回

その他、普通科部会2回、工業科部会3回



○検討された課題、分析、対応策

<p>課題Ⅰ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○入学希望者の減少(定員割れの心配) →不本意入学 →目的意識の低下 →学習意欲低下 ○入学者の学力低下 	<p>課題Ⅱ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○一部座学の授業が不成立 ○一部生徒に指導上の課題 →教科指導をいっそう充実させる必要
	<p>課題Ⅲ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域産業の担い手育成
<p>課題分析Ⅰ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中学校への説明不足・PR不足 ○中学生の普通科志向(大学進学志向) (自分が進学する)学校として決められない科を判断できない 	<p>課題分析Ⅱ</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育内容が分りにくい 成果が見えにくい(魅力を感じない)
	<p>課題分析Ⅲ</p> <ul style="list-style-type: none"> 進路への不安感



対応策

【入口】

課題1	中学校対策の徹底	→	対応
課題2	括り募集の導入・転科の弾力化	→	継続検討
課題2	建設工学科;コース制→類型	→	対応

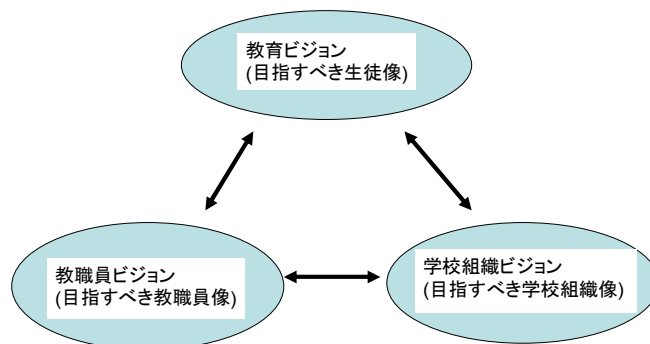
【より良い学校づくり】

課題2	総合選択制の導入	→	継続検討
課題3	共通実習の導入	→	対応
課題3	水曜日7限授業実施(工業科)	→	対応
課題4	基礎学力の向上	→	対応
課題4	授業力の向上	→	対応
課題5	資格取得(ジュニアマイスター等)	→	対応
課題6	生活指導(5S、あさひ)	→	対応
課題7	部活動(全国レベルに)	→	対応
課題9	地域産業連携	→	対応

【出口】

課題8	進路指導の一層充実	→	対応
	就職指導の充実(目標;100%内定)		
	国公立大学進学(目標;25名)		

3つのビジョン



学校改革への道『こうしたら学校は変わる!』 松原 和之

また、現在の「鳥エブランドの確立」には上記に示す教育ビジョン（目指すべき生徒像）しか描かれていない。学校ビジョンとするためには、教職員ビジョン（目指すべき教職員像）、学校組織ビジョン（目指すべき学校組織像）も合わせて考えていかななくてはならない。これが、現在の鳥エビジョンに対する課題である。

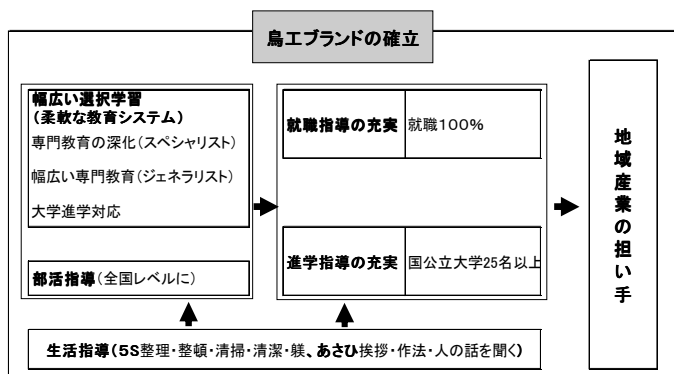
6. おわりに

今年度の学校改革プロジェクトで「鳥エブランドの確立」といった鳥エビジョンが形成されたのは、大きな成果であった。これまで、それぞれの科でバラバラのビジョンを持っていたものが、学校として1つのビジョンを手に入れることができたのは大きな進歩であり、これにより、ダイナミックに改革がなされると考える。また、これまで改革の論議さえタブーであった学校で、多くの職員が学校経営の視点で侃侃諤諤の話し合いが行われたのは今後協議する上で心強いものになったと思う。そして、学校改革には危機感を共有することや議論の場所・時間の確保、間合い、改革のモデルを持つといった一つ一つの小さなことの積み重ねが重要であり、そのことを私自身が改革論議を巻き起こす方法論として体感したことが最も大きな成果であった。

今後、この「鳥エブランド」を中心として、教職員ビジョン、学校組織ビジョンを確立・共有し、確固たるビジョンをもたなければならないと考える。そして、誰からも認知されるさらなる魅力的なストーリーが描けるような取組を推進していかなければならないと考える。

4. 研究のまとめ

上記の課題と課題分析、対応により下記のような鳥エブランドイメージが作られると考えた。



5. 今後の課題

この鳥エブランドの確立という鳥エビジョンを検証するとき、次の7つの点に注目して具体的な行動を検討する必要がある。

学校ビジョン7つの視点

- ①建学の精神・教育理念に基づいていること（一貫性）
 - ②現在（これから）の社会の要請に合致し、生徒・父母のニーズに答えていること（市場性）
 - ③他の学校との差が明確であること（独自性）
 - ④関係者（生徒・保護者・受験生・教員等）に分かりやすく誤解なく伝わりやすいこと（明瞭性）
 - ⑤魅力的なストーリーが背景にあること（物語性）
 - ⑥比較的長期にわたる概念であること（継続性）
 - ⑦教育活動の成果として実現できること（実現性）
- 学校改革への道『こうしたら学校は変わる!』 松原 和之

鳥エブランドの確立について①から⑦まで考慮されているが、「⑤魅力的なストーリーが背景にあること」について弱い感じがする。これから魅力的なストーリーが描けるように具体的な対応策を検討しなければならないと考える。

